

埼玉古墳群と稲荷山古墳出土の鉄剣

・加藤 幸一

I. 埼玉古墳群

1. さきたま風土記の丘について

「さきたま風土記の丘」は 国の文化庁の「風土記の丘」構想にのっとり昭和41年5月に用地の売収が開始され42年4月に埼玉県の予算に事業費が組み入れられ昭和42年10月から、この「さきたま風土記の丘」の工事がはじまったのである。

それまでは古墳を含めほとんどの土地が地元の人たちの所有地であった。このあたりは雑木もみられ野うさぎも住んでいてたき木をとったり二子山古墳では戦時中陸船が作られたりしたという。このままでは広域に渡って破壊が進みだめになってしまう。そんな思いで破壊をを防ぎ一般の人も利用できる史跡保存はと考えることができたのが「さきたま風土記の丘」である。こうして「さきたま風土記の丘」は宮崎県西都原古墳群について全国で二番目に造られた史蹟公園となったのである。そして現在では「さきたま風土記の丘」の大部分の土地が県有地となっている。

「さきたま風土記の丘」には国の指定史跡となった9基の古墳が現在残っており大型古墳群としては東日本最大とされている。この古墳群で最も古いのが丸墓山古墳とみられ次いで稲荷山古墳三番目は二子山古墳とみられている。また古墳の内部構造の発掘がすんだのは將軍山古墳(明治27年)と稲荷山古墳(昭和42年)の2基だけである。

この埼玉古墳群のある埼玉地方は行田市・加須市周辺を中心とする関東造盆地運動によって泥下してきた所(6世紀後半から約2mくらい沈下したと推定)の一部でそのため古墳群は水田の中に現在あるが本来は台地上

にあったものである。現在残っている古墳の他にも 多数の古墳があったが 明治から大正にかけて 土取りや盗掘などで破壊され姿を消した、さきたま風土記の丘の近くに「百塚」(百基ほどの高塚という意味)という地名があったのも このあたりに多くの古墳が存在していたことを物語っている

また この埼玉地方は 利根川と荒川にはさまれた肥沃な土地で 古墳時代から人が住みはじめ 5世紀後半から6世紀頃には 大集落ができてはじめたと推定されている。そのあらわれとして埼玉百塚群の東へ約2kmはなれた行田市小針の「ゴミ焼却場」敷地内の地下で 古墳時代の「小針遺跡」を発見(昭和49年)した。その後の発掘調査(昭和51年)によって住居跡7軒が確認されている。

この地域の古墳群は 武蔵国造である笠原一族の墓と考えられている。その理由の一つとして 現在の鴻巣市にある笠原について 承平年間(931年~938年)に著わされた「倭名類聚鈔」(俗に「和名抄」という)に この名がのっているし、また 江戸時代後期にできた「新編 武蔵風土記稿」に「武蔵国造 笠原直使主、小杵等も此辺に居りて 其名残るべし」と言記されていることである。

2. 笠原直使主 と 小杵 の 争い

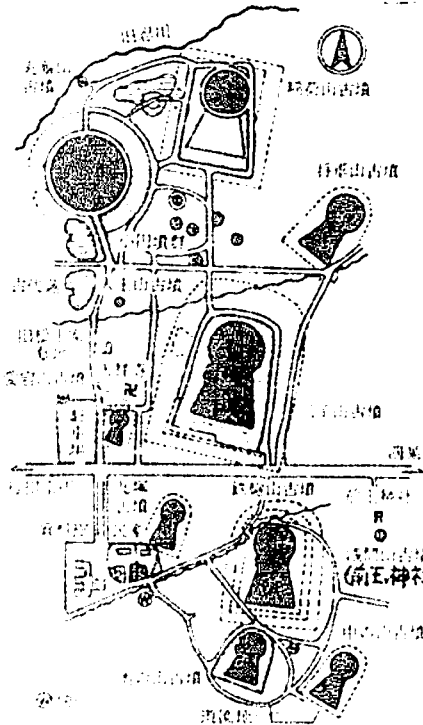
笠原直使主については 日本書紀の 安閑元年(531年、異説あり)の記述には 「武蔵国造の笠原直使主と同族の小杵とが国造の地位をめぐる争いを起こし 小杵は 上毛野(群馬地方)の豪族小原に後ろだてを求めて使主を殺そうと謀った。これを知った使主は京へ逃げ 朝廷にこのしどいを申し立てたところ 朝廷は使主がまぎれもない国造であるとし、そこで小杵を成敗した。使主はその感謝のしるしとして 朝廷に 横澤(比企郡吉見地方)、橋花(川崎市付近)、多米(東京多摩地方)、倉旗(横浜市付近)の四ヶ所の地を献じた」(大意)と書かれている。(多米の「米」は「末」の誤りとみられる)

なお 稻荷山古墳出土の銅鏡「画文帯神獸鏡」は 群馬県高崎市の八幡観音塚古墳出土の鏡と同じ鏡型で作った鏡(これを同範鏡という)であることが確認。武蔵と上毛野(今の群馬県あたり)が 何らかのつながりがあったと考えられ 金石文が刻まれていた鉄剣と同様 最近 注目されてきている。

埼玉古墳群

埼玉古墳群は、埼玉県の北部、行田市にあり、のどかな田園風景に一つまみれた、関東地方屈指の古墳群です。

古墳の旧形を遺すものは9基で、古墳群は国指定史跡となっています。かつては水戸墳も群在し、百塚の地名もあったほどですが、明治から大正にかけて破壊され、その多くは姿を消してしまいました。これらの古墳群は武蔵国高麗原直使上一族の墳墓と推定され、形式、出土遺物から見て古墳時代の後期（6世紀）に比定されています。



丸壘山古墳
直径160m、高さ16mの大円墳で周囲に深40cmほどの一重の堀をめぐらしていることが知られています。

二子山古墳
全長128mの前方後円墳で、東の堀があり、現在内堀が復原されています。

稲荷山古墳
昭和43年発掘調査より、主体部は粘土板と漆椀の二つが認められました。昭和48～49年の調査により、前方後円墳であることが明らかになりました。二重の方形周堀があり、後円部西側の周堀は、外堀。向かって方形に張り出し、幅1.5m程の土版で外部とつながっていることがわかりました。

将軍山古墳
全長91mの前方後円墳で、明治26年に発掘され、優れた遺物が多数出土しています。

瓦塚古墳
全長68mの前方後円墳。

鉄砲山古墳
全長108mの前方後円墳で、西側に遺出しを持ち、周堀を二重にめぐらしています。もと忍藩の砲術練習場となっていたのでこの名があります。

中ノ山古墳
全長72mの前方後円墳。もと3つ並んであった古墳の中央に存するのでこの名があります。

奥ノ山古墳
全長67mの前方後円墳。3つ並んでいた古墳の一番北（奥）にあるのでこう呼ばれ、周堀は昭和45年3月に復原されました。

愛宕山古墳
全長53mの前方後円墳。

(補説) 丸墓山古墳について……この古墳は円墳の中では日本で一番大きな古墳である。またこの古墳は「天正18年(一五九〇)に石田三成が忍城を攻めるため本陣を張った所でもある。」

(「県立さきたま資料館」のパンフレットから)

II. 鉄剣^{てつけん}に文字が発見されるまで

1. 鉄剣に文字が発見されるまで

金石文^{きんせきぶん}(紙以外の金属や石などに刻まれた文字)がみつかった鉄剣は行田市の「さきたま古墳群」にある稲荷山古墳から発掘されたものである。昭和43年に発見した時 さびにびっしりとおおわれ さやの一部とみられる所に炭化された木片^きがこびりついていた。県教委ではこの木片をはがしてはならないとしてそのままにして「さきたま資料館」に展示されていた。しかし鉄さびは年ごとにますますひどくなるばかりであった。それにさやの木片が浮きあがり今にもはがれそうだった。そこで鉄剣のまわりを樹脂でおおい長期間保存がきくようにと奈良県の元興寺文化財研究所に依頼したのが昭和53年5月のことである。「さきたま資料館」の二人の学芸員が箱に入れ列車で大事に運んだ。この時金泥粒^{きんじりゅう}をかくしていた木片がボロりと落ちたらしい。

この鉄剣は「さきたま資料館」から保存処理を頼まれた出作品の中で最も腐食^{ふしよく}が進んでいたため せうかいものに扱われ一番最後に保存処理をあとまわしされていたのである。同年7月26日、元興寺文化財研究所の女子研究員がフラシで土ぼこりを取り除いていた時、剣先のサビのあたりに光るものを見つけた。道具を使って恐る恐るけじを落とす。長さ3ミリほどの細い金色^{きんいろ}の筋^{すじ}を見つける。そしてこの筋は全部で三筋も見つかったのである。これが金泥粒^{きんじりゅう}の発見である。金泥粒の発見は象嵌^{ぞうがん}で刻み込まれた文字^{もじ}の存在^{そんざい}につながるという。象嵌とは鉄や銅などの上にたがね(金工用ののみ)で文字や模様^{もよう}を彫りそこに針金^{はりがね}のように細い線の金や銀を埋め込む手のこんだ細工^{さいこう}のことである。

同年9月11日午後6時ころ鉄剣のレントゲン撮影をおこない思いもかけないおびただしい古代の文字がくっきりと浮かびあがったのである。剣身^{けんしん}の面側^{めんがわ}全面に鉄剣の切っ先^{きりさき}から縦1列に刻まれた金象眼^{きんざんがん}の文字が二重合わせになった状態で透かし出た。合計115個を数えるが鉄剣そのものは、

くすんだ茶色の固まりと書いていいほど少しの振動で文字がずれ動くのではないかというあぶない状態だった。慎重に解説作業が夜まで及ぶ。そして9月17日深夜までにほぼ全文が解説され9月19日に公開され、9月20日の各新聞の朝刊には一斉に鉄剣解説文がのるのである。

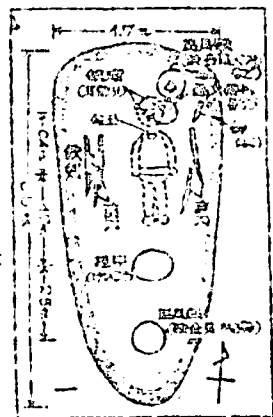
2. 鉄剣がみつかった稲荷山古墳について

埼玉古墳群を史蹟公園にするに当たって見学者のために一つくらいは古墳の内
部を見せようと言うことになり国指定の9基の古墳のうち発掘のすんだ將軍山
を除く残り8基の古墳のうち最も小さい愛宕山古墳を^{あたごやま}発掘することに決ま
りかけた。しかし史蹟保存が目的なのに完全な形で残っている古墳をた
とえ正式な発掘であっても破壊するのは望ましくないという反対意見で、
結局、未発掘の古墳のうち最もいたみの激しい稲荷山古墳に決まる
のである。この古墳は前方後円墳であるがそのうち前方部が削り
取られてないのである。そのいきさつをのべると次の通りである。稲荷
山古墳の後円部の頂上には稲荷神社が^{いなり}あって前玉神社の所有地となっ
ていて前方部は個人の私有地となっていた。ところがその前方部を所有
されているかたに不幸が続きその原因は前方部に埋まっている朱塗りの
壺が^{つぼ}わざわいを起こしているということになりその壺を掘り出そうと、
このあたりの古墳が昭和13年に国の史蹟となる前に土を全部取り除
いてさがしたが何も発見できなかったという。(読売新聞の「剣のナゾを
追って3」によるとその頃、^{じもと}地元には「金と同じ値打ちのある朱の^{しゅ}入った
瓶がどこかに埋か^いってある」といううわさがあったという。そして前方部
の土取りした土はトラックで今の行田高校となっている当時の^{おし}忍町立忍
商業校に運び埋め立てに使ったという)これがむしろ幸いし、稲
荷山古墳を発掘することになり今回の大発見につながったのである。

稲荷山古墳の発掘の作業が昭和43年8月1日から始まる。6世紀後半
の横穴式石室を予想していたので初め後円部の^{ちゆうぶ}中腹から掘り進んだ。だ
が1週間近くたってそれらしきものは見当たらない。どうやら見当ちが

いで たて穴式のようなのである。そこで方針を変え 頂上部から掘り直すと
 1mの深さですぐに礫層にぶつかった。これが話題の鉄剣が発見
 された所だ。ついで すぐ近くの同じ深さの所に粘土層が発見される。
 こうしてこの古墳から二つの埋葬施設が発見されたのである。礫層は6
 世紀初め、粘土層は5世紀末のものと推定されている。礫層の「石槨」
 は小石、「槨」はうわひつぎという意味で、ここで発掘された礫層は舟
 形に掘った穴の中に木棺を埋め、その周囲を小石でおおっている。
 小石の代わりに粘土を使ったのが粘土層である。粘土層は盗掘
 されて荒さしていたが、礫層の方は幸いにも盗掘されていなかった。

礫層の中央には木棺が置かれていたと推定され、この
 木棺は割竹形とみられている。これは太い木を二つに割り、そ
 れぞれの中心部をくり抜き、サンドイッチのようにして
 納棺するやり方である。また墓が舟形なのは、死霊
 が舟で死後の世界へ運ばれるという当時の信仰に基
 づくもので、棺と小石との間に木炭を敷き、除湿にも
 気を付けている。しかし古墳の土質が関東
 ローム層で酸性が強いため、人骨は溶けてなくなり



木棺も朽ちて土と化していた。出土品の中に画文帯神獸鏡(裏に
 は周縁部に帯状の文様があり、その内側に神と獣を描いた銅鏡)
 、当時としては大変貴重なヒスイの勾玉、今、話題にのぼっている鉄剣、
 その他の鉄剣、直刀、このように権力者のあかしである三種の神器
 (鏡と勾玉と剣をさす)がそろっており、おまけにいずれも逸品ぞ
 ろいときている。加えて、武具が豊富に出たことも調査団の目を見
 張らせた。

なおここに埋葬された人物は、武人で、今話題になっている鉄剣の
 金石文中のオノワケノオミではないかという説がでてきている。

「礫層」(棺のまわり)を河原石で囲った埋葬施設

III 鉄剣の文字の解説

1. 鉄剣に刻まれた金石文の解説

<読み下し文>

辛亥の年七月中に
 記す。乎獲居臣の
 上祖の名は意富比
 埴、其の児の名は
 加利足尼、其の児の
 名は三巴加利獲居
 其の児の名は多加
 被次獲居、其の児
 の名は多沙鬼獲居
 其の児の名は半互比

意富比埴 — 加利足尼 — 三巴加利獲居 —
 多加被次獲居 — 多沙鬼獲居 — 半互比
 加差被余 — 乎獲居臣

金石文に表わされた八代の系図

(おきて)
 辛亥年七月中記す乎獲居臣上祖名意富比埴
 其児多加利足尼其児名三巴加利獲居
 其児多加被次獲居其児名多沙鬼獲居
 其児名半互比
 (うら)
 具知名加差被余其児名乎獲居臣等為蘇我人
 首奉事未至今獲カ多文齒大玉持在斯鬼
 宮時五光治天下令作此百姉利刀記云
 奉事根原也

其の児の名は)加差被余、其の児の名は)

乎獲居臣。世々、杖刀人の首と為して事之奉り来り今に至る。獲加
 多七箇大王の寺(詔へ奉りて、時、時、時)斯鬼宮に在りし時、吾、天下を左治
 し(または「治むることを左け」、此の首纏の利刀を作らしめ、吾が事之
 奉る根原を記す也。

<大意>

辛亥の年(471年=雄略15年)の7月のうちに(詔書「剣のナソを造てら」には
 「7月中旬」と解説している)これを記す。私オノワケノオミ
 の祖先はオオビコ(四道將軍の一人)と申し、その子はカリノスクネ、カ
 リノスクネの子はテイカリノワケ、テイカリノワケの子はタカヒシノ
 ワケ。以下、タサキワケ、ハテイ、カサヒヨと続き、そして私オノワケノ
 オミが祖先のオオビコから教えて八代目である。代々、武人の頭領と
 して仕え、現在に至る。ワカタケルノオオキミ(雄略天皇とさす)が斯鬼
 の宮にいらした時、私は天皇が天下を治めることを助けた。そこで
 何回も練り直したこの見事な剣を鍛造させ、わが家系を記す次第だ。

2. オオビコ (オオヒコ) について

4世紀頃 崇神天皇が地方平定のため 4人の皇族を北陸道・東海道・西海道・丹波の四方に派遣したと日本書紀が伝えている。この四道將軍といふ意富比埜はそのうちの北陸道へ遣わされた大彦命をさすとみられている。(百事記にも四道將軍という文字はないがこれに似た記事がのっている) 大彦命は崇神天皇の伯父、孝元天皇の子にあたる。

なお大彦命の子武渟川別命も四道將軍の一人として東海道に派遣され、この二人の親子は会津で再会したという。

3. 「加差掖余」の読み方と「辛亥」の年について

乎獲居臣の親「加差掖余」は「かさはや」と読むべきで「笠原」と対応している。そして日本書紀にでてくる笠原直使主は加差掖余の子乎獲居臣と同一人物である。これより乎獲居臣(笠原直使主)が大正家に忠誠を奉るつもりで作った鉄剣であるから「辛亥」の年は471年でなくそれより60年後の531年とならなくてはならない。これは大野教授(学習院大)の主張である。

この鉄剣が発見された稻荷山古墳の礎石は6世紀前半と推定されている。「辛亥」を531年とすると剣を作らせてから間を置かないで古墳に埋められたことになる。また「辛亥」を471年とすると乎獲居臣が若い頃に剣を作らせ、6世紀の初めころに古墳に埋められたとなる。

4. 雄略天皇 について

雄略天皇は名を大泊瀬幼武尊という。鉄剣にでてくる「獲加多岐咄大王」は雄略天皇をさすと思われる。

この雄略天皇は中国の昔の書物「宋書」「南齊書」「梁書

に見られる5世紀に活躍した「倭の五王」(讚・珎・濟・興・武)の一人倭王武と同一人物(「武」とは幼武の「武」から)と考えられている。武は478年南宋の最後の天子である順帝に次のような上表文(君主に奉る文書)を送っている。

<読み下し文> 倭王武の上表文(「宋書」より)

…昔より祖禰躬ら甲冑を擐き、山川を跋渉し、寧處に違あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海の北を平ぐること九十五国。…

<大意>

…昔からわたしの祖先は自らよろいかぶとに身を固め、山や川を駆け回り、休むひまもなかった。こうして東は毛人(蝦夷をさすと思われる)の国五十五国を征服し、西は衆夷(熊襲をさすのか?)六十六国を服属させ、さらに海を渡って北(朝鮮をさすと思われる)では九十五国を平定した。……

また日本書紀には雄略天皇のことを「天皇、心をもって師とし、誤りて人を殺すこと衆し、天下そしりて大患、天皇ともうす」とある。天皇即位までの雄略天皇は皇位に遠い順位だったので競争相手を次々に殺害したし、わがままで激しい気性だったらしい。気に入った女性があれば、人妻でも奪った話なども話されている。

しかし一面純粹なところもあったようで万葉集第一巻巻頭の「籬もよみ籠持ち 掘串もよみ 掘串持ち この岡に菜採ます見 家聞かな 告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ しきなべて われこそませ われにこそは 告らめ 家をも 名をも」の歌は雄略天皇の作だと伝えられ、天皇が「春、岡の辺で 籠を持ち、掘串(木で作)。先をとからせて、土に刺し込む道

具)を持って若菜摘みをしている野の娘に家や名前を尋ねてプロポーズした時のものとされている。また古事記には、川のほとりで天皇の目にとまり、むなしく80年も召しを待った赤緒子に歌と縁を与えた話もある。

5. 斯鬼宮について

奈良県磯城郡朝倉村大字黒崎小字天ノ森(現在は桜井市黒崎)の「天ノ森の丘」に雄略天皇(天沼瀨^{あまほつせ}幼武尊^{わかたけのみこと})の宮殿「沼瀨朝倉宮^{ほつせあさくらのみや}」が建てられたと伝えられている。ここが鉄剣にでてくる「斯鬼宮^{しきのみや}」ではないかと推定されている。磯城郡の「磯城」は「斯鬼の宮」の「斯鬼」をさすと思われる。

6. 姓について

「姓」はもと氏人が氏上に対する尊称としてあり、特に各氏の尊卑を示すものではなかったが大和朝廷の支配体制が整うにつれ政治上の地位や家柄・職務などを示すものとして朝廷から認められ与えられるようになった。そのうち管内の有力豪族や地方の伝統的豪族、君・直などは有力な地方豪族・国造・連・造・首などは品部を率いた伴造に多くみられ、別は王族の系統に多いといわれる。渡来人の子孫には使主・忌寸・吉士・史・村主などの称があった。

鉄剣の金石文にでてくる人名の中に「ヒコ」「スクネ」「ワケ」「オミ」という表現法がある。これは「姓」の成立していない時代に使われた「ヒコ」、「姓」が出てくる時代の「スクネ」、「姓」の中でもすたれた「ワケ」と残った「オミ」が出てくる時代というように「姓」の成立過程や身分制度の変遷が読みとれるという。

7. 古代漢字が残っている金石文

わが国で刻まれた古代漢字が残っている6世紀以前の金石文は、次にあげるものだけである。(銘文は石や金銀器などに刻まれた文章)

・隅田八幡宮所蔵の人物画像鏡銘文

江戸時代に発見された銅鏡(和歌山県橋本市)

48字刻まれている。6世紀初め(503年)の継体天皇のころ(一説に443年)

・江田船山古墳出土の大刀銘文

明治6年に発見された大刀

74字刻まれている(銀象眼)。5世紀の反正天皇(一説に雄略天皇)

・稲荷山古墳出土の鉄剣銘文

昭和43年に発見された剣剣。今年(昭和53年)になって文字が刻まれていることに気づく。115字刻まれた金象嵌。

5世紀末(471年)の雄略天皇の頃(一説に531年)

なおわが国で刻まれたものではないがわが国で発見された金石文は「石上神宮の七支刀銘文」(369年の倭王の名を示す)、志賀島の金印(「漢委奴国王」と刻まれている)、奈良県天理市和尙の東大寺山古墳出土の後漢の「中平」(184~189)の年号を金象嵌で刻んだ鉄刀がある。

8. 江田船山古墳出土の大刀銘文の通説について

船山古墳出土の大刀に刻まれた金石文の中で「獲口口口歯大王」の文があり従来これは「獲宮彌都歯大王」、つまり反正天皇を示すというのが定説になっていた。しかし今回の稲荷山古墳の鉄剣銘文解説により「獲」「歯」は実は「獲加多支歯」の上下二字で反正天皇でなく雄略天皇をさすのではないかと疑問がでてきて、大きな衝撃を与えている。

これによると5世紀末の雄略天皇の頃すでに大和政権が武蔵

の国から^ひ肥の国にまで勢力が及んでいた可能性がうかがえる。

9. 鉄剣に刻まれた金石文の重要性

された稲荷山古墳出土の鉄剣銘文は

- ① 今までの金石文中 最長文である。
- ② 大王の名(雄略天皇をさすと推定)が明記されている。
- ③ 辛^と委が明記され 天皇の名と合わせ 年代が特定できる。
- ④ 雄略天皇の時代に 大和朝廷の勢力が 関東に及んでいたことは 宋書にのっている 倭王武の上表文に書かれており 明治以来の通説だが 今度の銘文は それを裏付ける可能性がある。

などの点で 貴重な発見だとされている。

この資料は 中学生の教材として書いたもの。 書くにあたって 次の新聞の資料などを もとにしてまとめた。

9月20日付 朝日・読売・埼玉・毎日 各新聞(朝刊)

読売新聞 よみがえった銘文！ 1～18

剣のナゾを追って(埼玉版) 1～7

夕刊の文化面(9月28日・10月3日・10月11日・10月17日)

埼玉新聞 ^{コトバ}埼玉・古代の鉄剣 1～9

朝日新聞 百十五文字の語るもの(上・下)